１９９８年3月８日

盛岡一高：授業「同一と差異」

東京の日比谷高校の出身です。東京大学理科１類に入学し、教育学部教育心理学科を卒業。大学院に進学。米国イリノイ大学大学院を卒業、Ｐｈ．Ｄ．。コーネル大学、お茶の水女子大学、東京大学、岩手大学、を経て、いま、川村学園女子大学に赴任しようとしている。お別れに、岩手県の最も優れた高校である、盛岡一高で授業をする。お別れの贈り物として。「業と業の授受」として。

名前を板書する。「吉田章宏」
今日、ここで、授業をすることを、喜びとする。
将来の、宮澤賢治、石川啄木、米内光政、新渡戸稲造、原　敬、・・・に、今出会っているのではないか、とも思える。

今、私は６３歳です。１５、６歳の皆さんとは、５０年近くの年齢の差異があります。この年齢の差異をどう考えますか。身長や体重の差異と同じか違うか。６３キロと１５キロと。１６３センチと１１５センチと。６３歳と１５、６歳の差異は、黒板に記す。
背の高さの違い（図示）。　年齢の違い（同様の図示／時代を考慮した図示）。　両者の同一と差異。　　私も、皆さんと同じ年齢であったことがある。それは、４８年も前のことだ。　それから、４８年も経った、ということ。　それは、ちょうど、皆さんがこれから、６３歳になるまでに経験する４８年と同じ年月、時間を、私が経験してきた、ということです。皆さんは、私の見ることのできない時代を生きて行くことになる。私には時間が残されていない。

板書　　１９９８年3月１１日

わたくし１９３４年　　．．．．．．．？
あなた
　　１９８３年

そして、今日のあなたと私の「出会い」は、それぞれの人生の時間の流れにおける、一時の貴重な出会い。奇跡のような出会い、なのだ。　板書　「Ｘ」の交差点なのだ。

皆さんと私の縁

私の経歴、中学を卒業してから高校へ行った。高校を卒業してから大学へ行った、そして、大学院に行った。それから、アメリカの大学に行った。シカゴの近くだった。アメリカの大学に勤めた。ニューヨークの近くだった。それから、３つの日本の大学、お茶の水女子大学、東京大学、岩手大学、の先生になった。
そして、いま、皆さんに、何か、皆さんのお役にたつことをお話ししたい、と願ってここに立っている。岩手県の盛岡一高で、皆さんと出会っている。不思議ですね。　なぜ、私は、いま此処に居るのか。私も考えた。「縁」というほか無い。不思議だ。

私の学んだことの中から私が大切だと思うことを、お伝えしたい。

板書　「同一と差異」、「同じか、違うか」
言い換えれば、「連続か、不連続か」。
これが、本日の私の授業の主題です。

「学ぶ」ということ／なぜ学ぶのか／一生学びつづけるということ／を一緒に考えたい。
学ぶということは、「同じか違うか／同一か差異か」を学ぶことである。「同一の中に差異を見る、差異の中に同一を見る」、「連続なものを不連続に、不連続なものを連続にすること、それが、科学の研究だ」（ポアン・カレ）
そして、「学問する」とは、「問うことを学ぶこと」と、「学ぶことを問うこと」である。

「違いがわかる男」というコーヒーのコマーシャルがあった。　皆さんに「違いも同じもわかる人間」になって欲しい、と私は願う。そこで、と言って、右端に板書する。

□　△　○

学年を横断する二つのグループに分けて、考えを出してもらう。出された考えを、次々にまとめながら、２列に、横書きで小さい字で、丁寧に板書する。
［こちらで用意してある考えは、『教育の心理』（Ｐ２３１）、以下の通りである。］
差異である。
「言語／それぞれに名称が異なり、四角、三角、丸である。
形状／角が四つ、三つ、零（ゼロ、無）である。四辺、三辺、無辺である。二つには直線部分があるが、他にはない。一つには曲線部分があるが、他には無い。二つは、日の丸に用いられているが、他は用いられていない。
基盤／
材料／異なる分量の白墨で描かれている。用いられた白墨（チョーク）の分量が異なる。影／それぞれに異なる物体・板の影である。影とすると、元の物体・図形も形が異なる。時間／異なる時間に描かれた（四角が最初、三角が次ぎ、そして、最後に、丸、というように）。空間／異なる空間に描かれている（四角は左に、三角は中央に、そして、丸（円）は右に。）。三つの中では、四角は右の図形で南側、三角は真ん中の図形、丸（円）は左の図形で、北側に描かれている。異なる面積の空間（平面）を囲っている。その面積を求める公式はそれぞれに異なる。$S＝L^2$、$S＝½HL$，$S＝\pi r^2$／図形を構成している線の長さが異なる。
人間／それぞれに引き付けられる人が異なる。（四角、三角、丸（円）それぞれを、最も好む人々が、選ぶ人々が、居る。）　それぞれに、人間を意味付ける象徴として、異なる意味を持つ。
四角い人間（四角四面な男）、三角の人間（三角野郎）、丸い（円満な）人間。

同一である。
「幾何図形である。
言語／それぞれに、同様に、名前をもった代表的図形である。
形状／左右対称な図形である。すべて、同様に綴じた図形である。
基盤／平面上に描かれている。同一平面上の描かれている。同一の黒板上に描かれている。
材料／同じ白墨で描かれている。そべて閉ざされた図形である。結ばれた紐で作れる図形である。ほとんど同じ大きさに描かれた図形である。
面積は、原理的には、同様にして、算出できる。三角形、二つの三角形（四角形）、無数の三角形（円）、として。

影／同じ一つの立体の射影でありうる。同じ一つの立体の影でありうる。

時間／ほとんど同じ時間に描かれている。同じ時間の歴史を経ている。
１９９８年３月１１日に描かれた。・・・。
空間／同じ場に、に描かれている。同じ宇宙の中に在る図形である。地球上に在る図形である。北半球の上に、日本の中に、東北地方に、岩手県の中に、盛岡市の中に、（盛岡一高の同じ教室）に、・・・
人間／同一人物（私＝吉田）によって描かれている。描いた人物は同一である。同一人物によって選ばれている。吉田が選んだ図である。
　盛岡１高の生徒たち皆が、いま同様に、同時に、眺めている図形である。」
　「自己同一性」、それぞれの図形は、それぞれに、自己同一である。
　面積は、すべて、三角形の面積の求め方で求める。この点において、同一である。繋がっている。　$S＝L^2$（＝２ｘ½ＬｘＬ）、Ｓ＝½ＨＬ，$S＝\pi r^2$（＝πｒｘｒ）
　まだまだ、あるかも知れない。興味が持てたら、これからさらに、もっと考え続けてみて欲しい。

　仙がい（脱字）の禅画を紹介する。本を見せる。同じ禅画に描かれている図形である。仙がい自身は、この構図について、何事も述べていない、という。だが、さまざまな人々が、この禅画について、さまざまな解釈を残している。板書の下に書き加える。
（『仙がい』３２～３６ページ）
１）地、火、水（密教では、地大、火大、水大）
２）私見（古田）によれば、天台、真言、禅
３）「ユニバース」と見る（鈴木大拙）。コンビナートとも見る。
４）三福神とみる。寿老、大黒、恵比寿
５）寒山拾得、豊干
６）釈迦、孔子、老子の三聖
７）悟りを描いたもの／ものの変化、運動／時間にも空間にも／定着することの無いこと８）その解釈は、無限に広がりを持ち得るところにこの構図の意義があるというたらいいかも知れない。
９）あらゆる問いに対しての答えを与えているもの
何と何か、どう同じで、どう異なるか。これを学ぶのが、学ぶということだ。

「自己と他者」（同一と差異）

「私と他の人／他者」どこが同じでどこが違うか

絶対的に異なる点が、一点ある。

ジェームズ、W．の言葉、分割線「自己と自己ならざるもの」

レインの言葉。「唯一のほんとうの旅は、・・・、同じ一対の目で幾百の異った国々を旅することではなくて、幾百対の異った目で同じ国を見ることであろう。」（『自己と他者』２７ページ)

教育とは人間と人間の「出会い」でもある。それぞれの人々は、人間であり、世界であり、歴史であり、物語である。

「教養」（ガダマー）「教養（Bildung）とは、他者に対し、また、自分の視点とは異なる、他人ならもつかもしれぬと想定される、より普遍的な視点に開かれていること。言いかえれば、世界と自己を他人の目で見ることができること」と、とらえていた。（『真理と方法Ｉ』）

多様な世界を体験することを通して、ガダマーの言う「教養」を身につけること、それが、教育の仕事である、とも言える。それは、多様な現実を可能性としてもつことであり、生きる力を身につけることであり、自由を現実化することであり、現実の拘束から解放されることにも繋がることである。

それはまた、いままで気がつかなかったこと、いままでの世界の自明性からは見えてこなかったこと、を教えられること。「当たり前であること、自明であること、ほど沈黙しているものは外にない。Nothing is so silent as that which is taken-for-granted or self evident(van Manen).」

出会いによって，出会いを通して、それぞれの自明性の世界（当たり前の世界）が、生きられる世界の自明性（当たり前）が、変わること。

志賀直哉　（ＴＰ）

寺田寅彦　（ＴＰ）

「人はひと吾はわれ也とにかくに吾行く道を吾は行くなり　寸心」

西田幾太郎

「我という人の心はだだひとりわれよりほかに知る人はなし」

谷崎潤一郎

「身のうちに未知の世界を見ることを歓びとする悲しみとする」

竹久夢二

「人おのおのこころ異なりわが歌やわれに詠まれてわれ愉します」

窪田空穂

「少年貧時のかなしみは烙印のごときかなや夢さめてなほもなみだ溢れ出ず」

坪野哲久

「うらをみせおもてをみせて散るもみじ」

良　寛

不来方のお城の草に寝ころびて
空に吸われし
十五の心

啄　木　（ＴＰ）

ＶＴＲ『ＰＯＷＥＲＳ　ＯＦ　ＴＥＮ』（１４分）

（ＴＰ）

井の中の蛙大海を知らず。
されど、井の中を知る。
大海の巨鯨大海を知る。
されど、井の中を知らず

吉田章宏

「子どもしかるな　来た道じゃ
年より嫌うな　行く道じゃ」

（ＴＰ）

To see a World in a Grain of Sand
And a Heaven in a Wild Flower,
Hold Infinity in the palm of your hand
And Eternity in an hour. (From "Auguries of Innocence" by William Blake)

わかり易い和訳、でも、詩人じゃない僕ゆえに、当然、拙い訳を試みてみますと・・・。
一粒の砂のうちにも［一つの］世界を見、
そして、一輪の野の花のうちにも［一つの］天国を見るために、
あなたの手のひらのなかに無限を、
そして、一時間のうちに永遠を、つかみなさい。(W. ブレイク作『無垢の前兆』)

仏教の「華厳経」というお経の「一即多、多即一」という教え、「微塵のなかに一切を見る」という心にも通じているようです。それは、「時間的にいえば一念のなかに永遠を見、空間的には一点の中に全世界を包摂する」（鎌田茂雄著『華厳の思想』講談社学術文庫、９０ページ）ということです。

無　題（一）　（ＴＰ）

日常生活の世界と詩歌の世界の境界は、唯一枚の硝子板で仕切られて居る。
此の硝子は、初めから曇って居ることもある。
生活の世界の塵に汚れて曇って居ることもある。
二つの世界の間の通路としては、通例、唯小さな狭い穴が一つ明いて居るだけである。
併し、始終両つの世界に出入りして居ると、此の穴は段々大きくなる。
併し又、此の穴は、暫く出入りしないで居ると、自然に段々狭くなって来る。
或人は、初めから此の穴の存在を知らないか、又知って居ても別にそれを探さうともしない。
それは、硝子が曇って居て、反対の側が見えない為か、或は‥‥‥餘りに忙しい為に。
穴を見付けても通れない人もある。（以上３ページ）
それは、餘り身體が肥り過ぎて居る為に‥‥‥。（以下４ページ）
併し、そんな人でも、病気をしたり、貧乏したりして痩せた為に、通り抜けられやうになる
ことはある。
稀に、極めて稀に、天の焔を取って来て此の境界の硝子板をすっかり溶かしてしまふ人がある。

（大正九年五月、渋柿）

『寺田寅彦　全随筆六』（岩波書店）

志賀直哉の「ナイルの水の一滴」　（ＴＰ）

「人間が出来て、何千萬年になるか知らないが、その間に数えきれない人間が生れ、生き、死んで行った。私もその一人として生れ、今生きているのだが、例えて云えば悠々流れるナイルの水の一滴のようなもので、その一滴は後にも前にもこの私だけで、何萬年溯っても私はいず、何萬年経っても再び生れては来ないのだ。しかも尚その私は依然として大河の水の一滴に過ぎない。それで差支ないのだ。」（志賀直哉全集、第七巻、岩波書店、六四七ページ）

この広大無辺の宇宙での独自な唯一の存在であることの自覚をもち、たとえ自らに恵まれたものは貧しくとも、そのような唯一独自な存在としての誇りをもって生きて行くために、僕が自分で作った諺（ことわざ）があるんです。ついでにちょっと、聞いて下さいませんか。周知の諺「井の中の蛙、大海を知らず」を少し発展させたものです。

<u>井の中の蛙、大海を知らず</u>。
されど、井の中を知る。
大海の巨鯨、大海を知る。
されど、井の中を知らず。

吉田章宏

もちろん、僕の名前を入れなきゃならない程、たいした諺じゃないんですが・・・、でも、

僕は自分で気に入り、おおいに悦にいっています。これを唱えると、自分がたとえどれほどちっぽけで蛙のような哀れな存在でも、決していじけることはないんだと「自覚」できるからでしょうか。は、は、は・・・。この広い世界で、誰一人として、独自なその人だけの世界をもたない人は、存在しないのです。そして、有り難いことに、僕もその一人です。そして、もちろん、あなたもそうです。

その他の蛇足
お伝えしたいことの核心。

困ったときにどうするか。　ともかく、自分でやってみるほか、ない場合もある。でも、失敗するかも知れない。痛い思いをするかもしれない。大切な命を落とすことだってあるかも知れない。

豊かに学ぶことが、大切だ。それの基本は、同じか違うか、連続か不連続か、ということだ。

自分はこの宇宙で、たった一人だ。自分と全く同じ人間はいないのだ。そして、自分は貴いのだ。学ぶことによって、新しい世界を生きるのだ。

学びの中でも、自分の間違いの経験、失敗経験から学ぶことが大切だ。

だが、他人の間違いの経験、失敗経験から学ぶことが、同じくらいに、大切だ。なぜなら、ある人の言葉にあるように、「自分の過ちから学べるほど、人生は長くない」からだ。

教えてくれる誰かに聞くのもよい。でも、教えてくれる人がいなかったらどうするか。
また、教えてくれる人が、間違ったことを教えたらどうするか。

経験を聞く人の範囲をどう広げるか。信頼できる、最も優れた人に聞くためにはどうしたらいいか。経験している人、賢い人、上手な人、巧みな人、・・・。

間違いを教える人もいる。どう見分けるか。

分からないことを分からない、と言ってくれる人は信頼できる。そして、もっと分かる人を教えてくれる人は、もっと信頼できる。　その人だけのため、自分だけのためでなく、困っている私のために、考えてくれる人は、信頼できる。
人の一生は短い／自分で経験できることは限られている。

しかし、その限界を超えることができる／動物との違い／「学ぶ」ことによって。